## ●はじめに

こんにちは、祐乗坊と申します。専門はランドスケープアーキテクト、造園家です。公園、広場、庭園など「緑」に関わる環境デザインが本業ですが、最近は、炭芸家、炭火焙煎士、生木木工家という肩書きが新たに加わりました。外から見ると、あれこれやっているので「本業は何ですか？」と聞かれそうですが、自分の中では「緑」を基軸として、すべてが繋がっています。環境デザインが、それだけ社会の様々な分野と関わりがでてきたということだと思います。

今日お話しする内容は、福井県の竹林問題の解決策を示すわけではありません。皆さんが取り組まれている、あるいはこれから取り組もうとされている竹林問題解決のヒントになればという思いでお話しさせて頂きます。

話の構成としては 4 つのテーマでお話しします。

最初は、皆さんが知っている「竹林問題」について再確認したいと思います。

次に、「竹林問題」の取り組みについての国内の最新情報を提供します。できるだけホットな市民活動や竹ビジネスについて話題提供させて頂きます。

そして 3 つ目のテーマとして、私が住んでいる多摩ニュータウン地域で 35 年余り取り組んできた「炭やき活動」を中心に、地域の緑と人との繋がりなどをお話しします。皆さんがこれから取り組む「令和竹取物語」へのヒントが見つかることを期待しています。

最後に、「越前・竹取物語」への私の妄想を少しお話しさせて頂きたいと思います。

## ●福井県の竹林って、どんな風景？

今日のフォーラムのご依頼を受けたとき、気になったのは福井県の竹林の風景でした。どんな風景なのか。インターネットで色々と探してみましたが、いまいちイメージが見えてきませんでした。そこでふと思い出したのが、石川さゆりの『越前竹舞い』という歌でした。悲恋の女心を綴った歌なのですが、改めて聞きなおすと歌詞の中から越前の竹林風景がおぼろげながら見えてきました。会場でこの歌を聴いて頂きたかったのですが準備できませんでした。歌の中から竹林の風景を思い起こさせてくれる歌詞を拾い出してみます。

まず目にとまったのは、♪障子開ければ　ああ一面　竹の海♪という歌詞。海原のように見える竹林というのは、背丈が低い竹や笹の竹

林でしょうか。そして、♪マダケ、クレタケ、ハコネダケ、ヤダケ、クロタケ、オナゴダケ♪と竹の種類の名前が続きます。これらはどれもモウソウチクのように太く逞しい竹ではなく小型の竹類です。しかも、ヤダケやオナゴダケは笹類です。「越前竹舞い」の歌詞からは、細身で小型の竹類と笹類が生い茂る竹林の風景がイメージされます。皆さんどうでしょうか？

このイメージが正しいかどうかは別にして、福井県の竹林が石川さゆりの歌に登場するだけで、石川さゆりファンとしては、福井県の竹林問題をなんとかせにゃいかんと思った次第です。

余談ですが、竹はドイツ語で der Bambus 、男性名詞です。フランス語やイタリア語も男性名詞です。竹林と恋歌、竹林と女性は相性が良いのかも知れません。

## 1．竹林問題の再確認

### 1）「竹林問題」って、何が問題？

竹林問題は全国に拡がっているので、今日ご参加の皆さんは現状を理解されていると思いますが、話の前に「何が問題なのか？」を改

めて整理しておきたいと思います。

まず、竹林問題の背景にあるのは、戦後の高度経済成長に伴う大量生産大量消費がもたらした産業構造の変化です。プラスチックという新しい素材の登場で、生活の中で使われていた竹製品は、安くて使いやすいプラスチック製の工業製品に置き換わりました。それにより、素材としての竹の需要が減少していった訳です。需要が減った竹林は、生業を支えていた経済林としての価値を失ってしまい、手が入れられないまま放置されてきた、というのが竹林を取りまく社会環境の大きな変化です。

そして、放置された竹林が雑木林や森の中にどんどん繁茂し、樹林の環境を荒廃させている状況が全国に拡がってしまいました。かつて畑だった休耕農地が竹林になってしまった場所も多いです。竹は地下茎で繁茂していくので、放置すればあっという間に拡がっていきます。竹藪という言葉があるように、放置し繁茂した竹林は人も通れないヤブです。既存林を駆逐しヤブ化した竹林は、林床に日が当たらず生物多様性も喪失してしまいます。その結果、斜面地では土砂崩れなどの災害を引き起こす危険性があります。これが、竹林問題の現状です。

その対策として、いま皆さんが取り組もうとされている竹林管理があります。理想的な竹林管理として「番傘をさして歩ける密度」ということが良く言われます。ヤブ化してしまった竹林の密度を下げながら、竹の活用を図っていくという考え方です。竹林を皆伐するのではなく、竹林と共存していく管理手法です。我々の生活が変わってきただけで、竹は何も悪くない。むしろ、竹を暮らしの中に活かしてきた日本の竹文化を継承し、経済林として復活できる竹の新たな活用方法を模索していくことが大事だと思います。

今日は、そのヒントになるような話ができたらと思っています。

## 2）素材としての竹の利用

会場の皆さんも覚えていらっしゃる方がいると思いますが、子どもの頃にはリヤカーを引きながら“タケや～さおダケ～”と売り歩く竿竹屋がいました。あの時代は、物干し竿はどこの家でも竹を使っていました。

竹が身近な素材として生活に活かされていた時代ですね。

ザルやカゴなどの日用雑貨はプラスチックなどに代わりつつありますが、やはり竹の持つ自然素材のしなりや手触りの良さはプラスチックに勝ります。茶道具などの伝統工芸品は、まだ自然の竹が使われています。長く使い込まれ飴色になった竹の風合いは自然素材ならではの美しさです。これらの日用品や工芸品にはマダケやハチクなどが主に使われています。

日本庭園では、様々な種類の竹が使われています。特に生垣には多様な様式があり、日本庭園に竹は無くてはならない存在です。

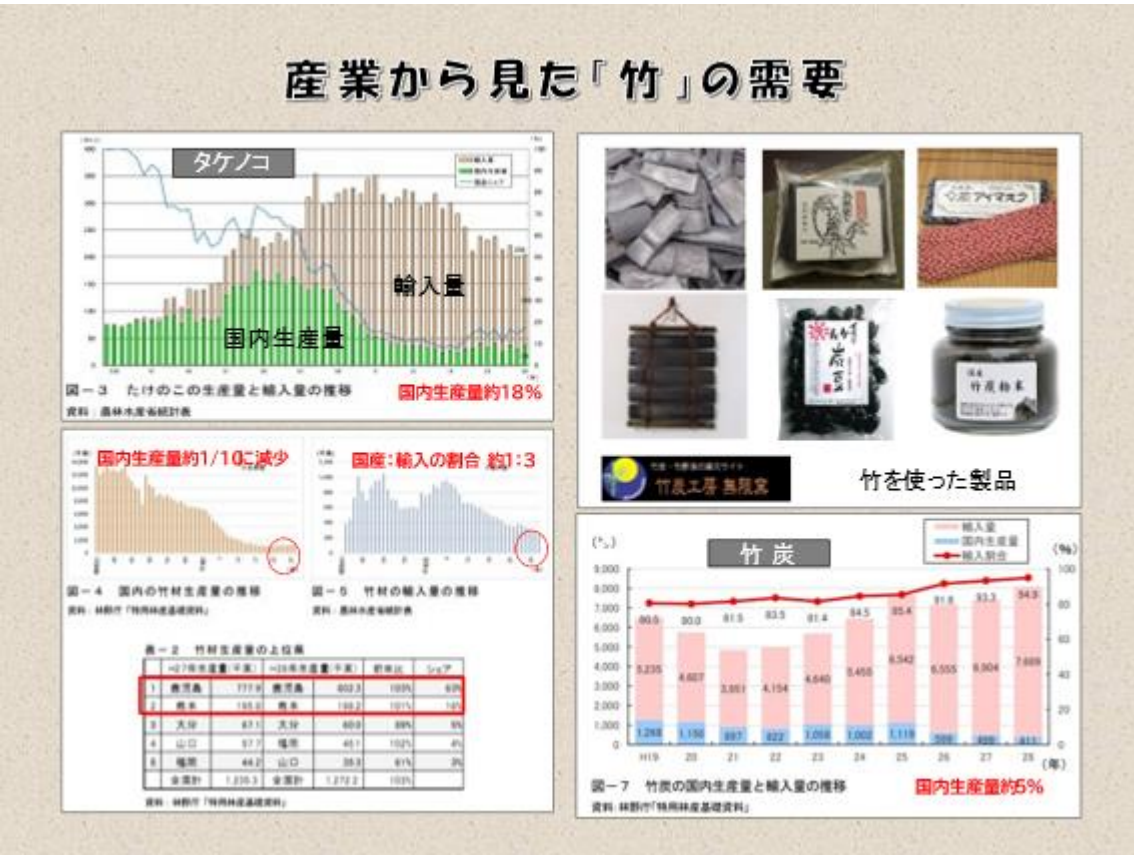
建築では、家の土壁（竹小舞）の下地に竹が使われていましたが、今は断熱材と石膏ボードが一般的となり、土壁の家を作る人はほとんどいなくなりました。現在は、インテリアなどの内装材として使われる程度です。土木では、「竹筋　コンクリート」と言って、コンクリートの骨材として鉄筋の代わりに竹が使われていた時代がありました。東南アジアや南米など竹が生育している国々では、今でも竹の建築物が活躍しています。

「竹林問題」ではモウソウチクが中心になりますが、竹の国内需要で見るとモウソウチク、マダケ、ハチクの 3 種で約 9 割を占めていま

す。その内、マダケ、ハチクは日本の固有種です。

現在、竹の新たな利用方法として注目を浴びているのが、竹の植物繊維を活かした「セルロースナノファイバー（CNF）」です。鉄の 1/5 の軽さで鉄の 5 倍以上の強度を持つ新素材です。市民活動とはちょっと縁遠い利用方法ですが、産業的に需要が見込まれれば「竹林問題」解決に繋がる可能性があります。

## 3）産業から見た竹の需要




では、産業から見た「竹」の需要はどのくらいあるのか。この資料のグラフは農水省のデータですが、昭和 40 年代前後の最盛期に比べると「竹材」の生産量は 1/10 以下に激減しています。輸入されている「竹材」も最盛期の 1/5 程度に減少しています。やはり、建築材や内装材としての需要が減るなど、産業に使われる「竹材」の需要が確実に減っていることが分かります。

もう一つ、身近な食材の「タケノコ」の生産量を見てみると、グラフのように最盛期の約 1/4 程度に激減しています。しかし、輸入されるタケノコの量はやや減少傾向にあるものの、現在の国内需要の 8 割以上をシェアーしています。タケノコの需要はあるのに、国内自給率

がたったの 18%というのが現状です。我々が食べているタケノコは、ほとんどが輸入されたものなんですね。食糧自給率向上からも課題です。

「竹炭」は最近見かけることが多くなってきましたが、需要の約 95%は輸入竹炭で賄われているというのが現状です。「竹炭」は、燃料としては扱いにくいので、脱臭とか加工製品とか装飾品など燃料以外の用途に使われることが多く、新しい製品も生まれています。輸入量は少しづつ増えています。輸入先は主に中国です。「竹炭」は自分たちで製炭し使っている場合も増えていますが、それはこの統計には反映されていません。

## 2. 竹の活用に向けた取り組み

### 1）市民による取り組み

それでは、竹の活用に関して全国でどのような取り組みが行われているのか。全国には、竹林整備活動を行っている市民団体の方々が沢山います。皆さん、竹林整備で出た竹の活用では、試行錯誤をしながら取り組んでいると思います。

その中から、これからの竹林整備の活動に参考になると思う、千葉県長南町にある「NPO 法人竹もりの里」を紹介します。紹介する内容は、私が取材したものではなく「竹もりの里」のホームページから得た情報であることをお断りしておきます。

「竹もりの里」の活動で素晴らしいと思うのは、一つは放置竹林の環境改善で得た竹材活用を事業として展開していることです。事業内容は、竹炭、竹肥、薪、タケノコ、エクステリアなど多用途です。タケノコ掘りを有料で行うなど市民を巻き込んだ事業展開も行っています。そしてもう一つ素晴らしいのは、各事業で生産したものをインターネット販売していることです。

里山資本論が一時話題になりましたが、竹林や雑木林の資源活用のビジネスモデルを構築し事業収益を得ていくというのは、これからの里山活動で重要なテーマだと思っています。里山活動を経済システムに落とし込んでいかないと、ボランティアだけでは未来への継続は難しいと思っています。「竹もりの里」のホームページに、“もがきながら行っていきます”と書かれているので、彼らも知恵を絞りながらチャレンジしているのだと思います。頑張って欲しいですね。

福井市には「ふくい市民活動基金助成事業」というのがあって、10 万円から 40 万円のサポートが得られるようなので、こういう身近な制度を活用するのもはじめの一歩としてお勧めします。竹林整備に関しては、手引きやマニュアルといったハウツーの参考書が手に入るようになりました。林野庁の「竹林利用の手引き」をはじめ、京都府や静岡県などの自治体でも作成しています。インターネットでダウンロードできるものもあるので是非入手し参考にして下さい。

## 2）企業による取り組み

「竹繊維」や「竹紙」など、竹を使った製品がちらほら目につくようになってきました。私も竹繊維を使ったシャツを持っていますが、着心地が良いので夏は良く愛用しています。

竹製品の最先端は、先ほどお話しした「セルロースナノファイバー」です。竹から取り出した繊維をナノ、10 億分の 1 に微細化した新素材です。鉄よりも軽く鉄よりも強靭で、熱膨張しにくく吸湿性があるのが特徴です。紙製品などに既に実用化されていますが、本格的な製

品が出回るのはこれからでしょう。その内、セルロースナノファイバーを使った製品がどんどん身近になるはずです。竹材需要拡大の救世主になるかもしれません。ですから、将来的な需要に対応できる、輸入材に負けない国内の竹材供給体制を整えていくことも大切です。

「竹紙（たけがみ）」も竹繊維に着目した製品です。国産の竹を100％使った製品を製造する中越パルプ工業川内工場（鹿児島県）が先端を走っています。工場のある鹿児島県は、竹材生産量が日本一です。そういう立地条件も産業としては大事ですね。

竹をパウダー状に粉砕した「竹粉」では、大和フロンティア（宮崎県）が竹粉を加工した牛・豚用の飼料「笹サイレージ」を製品化しています。牛の肉質向上や豚舎での臭気対策にも効果があるようです。「竹肥」としても商品化しています。

土木系の資材として「バンブークレイ」という土系の舗装材があります。これも竹の繊維の特性を活かした製品で、真砂土に繊維状に砕いた竹を混ぜ合わせた舗装材です。これまで木のチップを混ぜた舗装はありましたが、竹はしなりや強度があるので耐久性があるかもしれません。私はまだ仕事で使ったことはないですが、竹の繊維がすき込まれているので足裏に柔らかさを感じる、歩きやすそうな舗装を

イメージします。NIPPO と福岡大学が共同で開発した新しい工法で、実績が出てきているようです。

そして、最近静かな拡がりを見せているのが「メンマづくり」です。「純国産メンマプロジェクト」というのが 2021 年に発足し、現在メンバーが全国に約 110 団体ほどいます。すごい拡がりですね。放置竹林を活かしてメンマを作るという、竹の資源化と竹林との共存という取り組みです。これまで注目されていなかった、採り損ねたタケノコから生長した幼竹を原料にするという美味しい活動です。福井でも取り組まれているようですので、是非ビジネスに繋げて欲しいですね。

その他、竹繊維などの植物バイオマスを原料とした、皿や器などの食器類やストローなどあります。これらは“自然に戻る素材”として注目されています。また、竹チップを燃料としたボイラーと足湯を組み合わせた製品など、皆さん色んなアイデアを製品化に繋げています。

企業も、竹を古くて新しい素材として注目し始めてきています。市民レベルだけでは、竹材活用の解決策は見えてこないのが実情だと思います。これからは、企業の取り組みと連携できる方法を模索することも大事だと思います。

## 3. 光り始めた「たまニュー炭」物語

### 1）窯場のある地域の概況

それでは、ここから私が取り組んでいる炭やき活動について紹介します。竹炭を中心に行っているわけではなく、主に市内の公園や緑地の伐採木を炭材に炭やきを行っています。炭焼き窯を管理する市の「教育委員会」と炭材を提供してくれる「公園緑地課」と連携し行っています。35 年余り続けている「たまニュー炭」物語から、皆さんが何か活動へのヒントを見つけていただければと思います。

まずはじめに、炭やき活動を行っている窯場周辺の概要をご紹介します。場所は、東京都の多摩地域、多摩ニュータウンです。窯場のある中央部が多摩市、東側が稲城市、西側が八王子市、南側の一部が町田市になります。多摩ニュータウンは入居が始まってから 50 年以上経ちますが、昔は農地と雑木林で囲まれた里地里山でした。これが多摩丘陵の原風景です。雑木林は薪炭林として、薪や炭に活用されていました。

多摩ニュータウンは、奥多摩山地の裾から延びる丘陵地の一つ「多摩丘陵（南尾根）」に位置しています。また、ここから三浦半島に連なる丘陵地を「多摩・三浦丘陵」と呼んでいます。形がイルカに似

ているので「イルカ丘陵」とも呼ばれています。

「多摩丘陵」は、かつての武蔵国と相模国を分ける国境でした。武蔵国国府だった府中と鎌倉幕府を結ぶ鎌倉街道など、いくつもの古道の記憶が眠っています。多摩丘陵の尾根道に整備された遊歩道「よこやまの道」には、そんな古道がいくつも交叉していて、里山の四季を楽しめる人気のハイキングコースになっています。

また、丘陵の尾根は多摩川の大分水嶺です。大分水嶺というのは、生態系として大きな環境の区界です。ここは、歴史的にも環境的にも大事な場所で、多摩ニュータウンを支える環境の“屋台骨”になっている里山です。こんな素晴らしい多摩丘陵で炭やきを行っています。

## 2）「炭やき」で地域の生活文化を繋ぐ

この図は地元の古老の方が書いた「暮らしぶり図絵」という本から抜粋したものですが、昭和の時代には雑木林や竹林は暮らしの中で多様に活かされていました。

雑木林は薪炭林と呼ばれ薪や炭として経済的価値を生み出す実用林です。雑木林の落葉も「くずはき」と言って現金に換えられ商売になりました。多摩村だった時代には養蚕が盛んでしたから、蚕の暖房用にも自前で炭を焼いていました。多摩ニュータウン建設が始まった当初には、そのような炭焼き窯がまだ残っていました。私が多摩ニュータウンに住み始めた 1985 年（昭和 60 年）頃にはもう炭やきは行われていませんでしたが、窯跡がいくつかありました。

「メカイ」という自生するアズマネザサを使った籠造りが農閑期の現金収入として盛んでした。これは地域の特産品です。市内には、このメカイの技術を伝承する「多摩めかいの会」があります。この製作技

術は「東京都指定無形民俗文化財（民俗技術）」に指定されています。

里山の恵みは特別なものではなく、地域の暮らしに欠かせない当たり前の存在でした。私の行っている炭やきも、地域の自然の恵みを活かし、炭やきの風景を未来に繋いでいくことを大事にしています。地域の緑の管理から生まれた伐採木や剪定枝を炭にし、それを地域に循環させることが活動の目的でもあります。

## 3）炭やき事始め　～子どもたちと炭を焼く～

私が炭やきを始めたきっかけとなったのは、1987 年朝日新聞の「天声人語」に八王子市南浅川地区で炭を河川浄化に使うという記事です。紹介された現場に行って話を聞くうちに炭の魅力に心が惹かれ、炭やきをやってみようとなりました。その後、南浅川から借用したドラム缶窯を使い、参考書を片手に見よう見まねで炭やきを始めました。人生最初の炭やきは「ガーデンシティ多摩」という地域イベントでした。当時はまだニュータウン開発中だった多摩センター駅前周辺や公園予定地などの空き地を使い行いました。

その内、地域の小中学校から炭やき体験の依頼が来るようになり、学校の校庭で子どもたちとの炭やき活動が本格化しました。私の住んでいる地元では、公園の協力を得て雑木林の木を切る「木こり体験」と「炭やき体験」をセットで行う活動を 10 年ほど続けました。木こり体験は雑木林の萌芽更新のお手伝いにもなりました。子どもたちに雑木林で樹を切らせ、切った材を自分たちで運んで炭に焼くという、なかなかできない炭やき体験です。やはり、木を切る作業から炭やきを行うと、子どもたちの活動への理解や意欲が違います。近くの公園にある雑木林で遊ぶ子どもが少なく、子どもたちを雑木林に連れて行くだけでも良い体験活動でした。学校での炭やきは、校庭の砂場を使いドラム缶窯でやります。砂場はドラム缶窯の設営も楽で、副産物として砂の熱消毒にもなるのでお勧めです。

## 4）本窯を使った「一本杉炭やき倶楽部」の立ち上げ

炭やき活動を 10 年ほど続けていた 1997 年（平成 9 年）に、炭焼き窯を公園に造る話が持ち上がりました。多摩ニュータウン 30 周年記念事業の一つとして、当時の住都公団（現在の UR 都市機構）から、炭焼き窯整備の業務を依頼されたのです。ドラム缶窯から本窯の炭やきに一気にステップアップした、私の炭やき人生の新たなエポックになりました。

本来は公共工事だったのですが、造るなら「市民参加型」でやりたいと考え提案し実現できました。なぜ市民参加にこだわったのかと言うと、窯の完成後の運営を見据えてのことです。私が窯を作った当時、周辺の都市公園でも炭焼き窯が作られていました。しかし、見学に行

くと 1 年に 1 度イベント的に使うくらいで、ほとんど使われていなかったのです。窯の周囲がフェンスで囲まれ窯の見学もできない、というのが多かったです。「それはもったいない」と思っていたので、窯作りに参加した人たちに思いを窯の運営にまで繋いでもらいたい、と考え「市民参加型」にこだわったのです。

炭焼き窯の本窯を造るのは初めてですから、炭やきの専門家の杉浦銀治先生（故人）に指導をお願いしました。先生から色々と学ばせて頂き、私が勝手に“師匠”と思っていました。炭焼き窯は、基本的にその地域にある素材を使って造るので、多摩川の玉石や奥多摩の木材などを使って、炭焼き窯の風景づくりにもこだわりました。窯の完成後に、窯造りに参加した市民に呼びかけ「一本杉炭やき倶楽部」を立ち上げました。市民参加型で造ったプロセスが成功しました。

一本杉炭やき倶楽部を立ち上げ 25 年、現在 17 名の会員がいます。そのうち女性会員が 5 名います。会員の若返りや世代交代はどこの団体でも課題です。我々の会は幸にも毎年少しづつ若い人が増えています。若いと言っても私より若いということで 4～50 歳代です。学生や 20 代の若い人は参加しても、なかなか長続きしません。若い人にも魅力を感じてもらえる活動や運営への工夫が必要と感じてい

ます。

## 5）一本杉炭やき倶楽部の活動理念

一本杉炭やき倶楽部はただ炭を焼いているだけではありません。活動へのこだわりが色々あります。その一つが、多摩市内の公園や街路樹の伐採木を活用するということです。私の炭やきの始まりは、多摩ニュータウンの造成から出てきた伐採木の活用でした。緑のリサイクル、緑の循環というテーマで市と連携しています。

多摩ニュータウンで炭やき活動を行っているので、できた炭を『たまニュー炭（たん）』と命名しました。このネーミングの評判が良く、知名度が上がっています。資料に使った『光り始めた「たまニュー炭」物語』の絵は、窯場の雪景色を仲間の画家が描いてくれたものです。

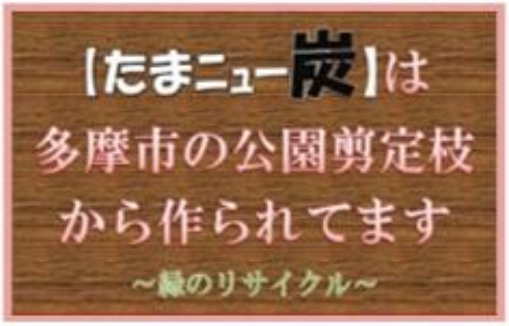
炭やきは 11 月から 4 月のシーズンに 3 回行っています。3 回で約 800kgの炭が出来ます。この炭を「防災用備蓄燃料」として、地域で防災活動をしている団体に無償で提供しています。案内パンフレットを作り、希望者を募っています。一斗缶に入れた『たまニュー炭』も作っています。一斗缶は乾パンなどの防災用品が入っていた空き缶で、防災訓練の際に出たものを譲り受け使っています。缶の蓋をテープ

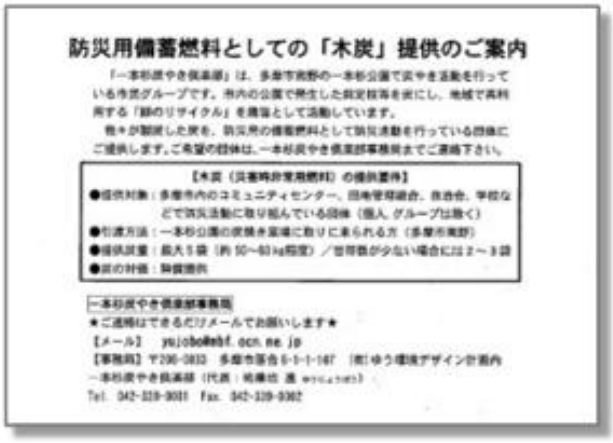
で塞いでいるので外気に触れずに保管性が良いです。この一斗缶入りの「たまニュー炭」は、地域のリサイクルセンターで「防災用備蓄燃料」として販売しています。家に一缶あれば、いざという時に備蓄燃料として使えます。

炭は備蓄燃料として優れています。ガスとか液体は保管性が良くありません。炭はいくら古くなっても炭素ですから経年劣化しません。水に濡れても乾かせば燃料として使えます。そして火力があるので災害時に役に立ちます。

また、炭焼き窯の近くに移築保存された「旧加藤家」という古民家があります。その古民家の囲炉裏に我々が焼いた炭と木灰を提供しています。市民が古民家を利用する時にも使ってもらっています。我々の作業から木くずが出ます。その木くずは古民家で飼っているチャボの鶏舎の床に使っています。古民家の管理人が喜んで引き取りに来てくれます。もう、古民家と一本杉炭やき倶楽部の活動は一体になっています。

一本杉炭やき倶楽部の活動は、資料の図のように公園や地域そして古民家と連携しながら、市民にこういう体験活動や出会いの場を提供し、多摩ニュータウンの新しい里山文化を伝承していくことを目指しています。





防災用備蓄燃料としての「木炭」提供のご案内

「一本杉炭やき倶楽部」は、多摩市南野の一本杉公園で炭やき活動を行っている市民グループです。市内の公園で発生した剪定枝等を炭にし、地域で再利用する「緑のリサイクル」を推進として活動しています。

焼き上がり製炭した炭を、防災用の備蓄燃料として防災活動を行っている団体にご提供します。ご希望の団体は、一本杉炭やき倶楽部事務局までご連絡下さい。

【木炭（災害時非常用燃料）の提供要件】

●提供対象：多摩市内のコミュニティセンター、自治会、自治会、学校などで防災活動に取り組んでいる団体（個人、グループは除く）

●引渡方法：一本杉公園の炭焼き窯場に取りに来られる方（多摩市南野）

●提供数量：最大5袋（約50～60kg相当）／世帯数が少ない場合には2～3袋

●炭の対価：無償提供

一本杉炭やき倶楽部事務局

★ご連絡はできるだけメールでお願いします★

【メール】 yujobokk@f.ocn.ne.jp

【事務局】〒206-0033 多摩市落合6-1-1-147 （有）ゆう環境デザイン計画内

一本杉炭やき倶楽部（代表：佐藤佑 [illegible]）

Tel. 042-339-9031 Fax. 042-339-9302

## 6）窯場は「里山の縁側」

その延長でもう一つ大事にしていることがあります。「人と繋がる」という事です。

炭焼き窯は公園の中にあるので窯場の横を色んな人が通ります。「よこやまの道」という「新日本歩く道紀行 100 選」に選ばれた人気の遊歩道ルートが窯場の前を通っているので、週末は大勢のハイカーが通ります。そして、大概の人が「何だろ？あそこで何かやっているぞ」という様子でこちらを見ます。でも、見ず知らずの人たちが黙々と作業している場には入りにくいですよね。ですから、「立ち止まった人には声をかける」というのを会のルールにしています。通りかかった人に「いま炭やきをやっていま～す。どうぞ立ち寄って下さ～い。」と声がけをします。そうすると関心のある人は足を止め窯場に入ってきてくれます。そして、立ち寄ってもらえれば、炭や炭やきについて説明し、お土産に炭をあげます。

散歩に来て窯場に立ち寄ったら炭をもらった、と皆さん喜んでくれます。散歩の土産話になっているかもしれません。地元多摩市の PR にもなっていると思います。作業の休憩時間に立ち寄られればお茶のサービスもします。お茶を飲んでいるときに、初めて出会った者同

士がこの窯場で会話を始める。そんな楽しい風景もあります。また、これをきっかけに炭やき倶楽部の会員になった人もいます。

一本杉公園の窯場を『里山の縁側』にしたいと思っています。窯の入口には『里山の縁側』の看板を立てアピールしています。「縁側」という言葉には、おばあさんが座っていて近所の人が通ると「お茶を入れたから寄っておいで」と言ってご近所同士のコミュニケーションが始まる、というイメージがあります。「里山の縁側」では、そんな人と人の繋がりが生まれています。

このイラストは展示会などでよく使っているものですが、仲間の絵描きさんが会の色々な活動や作業の様子をパネルに描いてくれたものです。窯に火を入れた後の「夜の窯番」の様子や子どもたちとバームクーヘンを焼く様子、3 月に行う「炭やきコンサート」の様子などが楽しく描かれてます。恒例になった「炭やきコンサート」は、今年は7組参加して頂けることになりました。プロの方も来られます。出演料は炭です。“音楽と炭の物々交換”という開催の趣旨に賛同して下さったミュージシャンが出演してくれます。特に集客の宣伝はしないので、公園を散歩していた人がお客さんになるミニミニコンサートです。

ただ好きな人が炭を焼いているというだけでなく、こういう楽しさがあるから、そこに人が集まり、そこから繋がりが出てきます。炭やきを媒体にして、地域の人と人とが繋がっていく出会いを大事にしています。

最近、オンラインによる火入れ作業の生放送を試験的に始めました。インターネットを使った炭やき体験です。火入れ作業のライブ配信中に、オンラインで窯場に来れない人から「火入れ」や「窯への薪投入」の注文を受け付けます。市外からも申し込みがありました。そしてライブ中に「〇〇さんの代わりに火入れしま～す。」と注文された作業を会員が代行してあげます。現場にいなくても炭やきを体験できるという新しい試みです。まだ始めたばかりですが、何か新しいことが触発されて起きるのではないかと期待しています。

ドラム缶窯で始めた炭やきが、人と人の出会いを繋ぐ「里山の縁側」にまで深化してきました。炭を焼くだけが活動の目的ではないのです。

## 7）“まちの樹活用”の新たなチャレンジ
## ～まちに製材所を作る～

炭やきを長年やっていてライフワークになったのが「伐採木の活用」です。この資料の画面は多摩市で講演した時に使ったデータですが、多摩市内の公園や街路樹の維持管理から年間どのくらいの伐採木が発生するのか。市に調べてもらったら年間 884tありました。市が把握しているだけで年間約 800t以上もあるんです。この数字に含まれない団地など民間の住宅地から出る量も入れれば 1,000tを超えると思います。そのほとんどが伐採木の廃棄物業者に持ち込まれ、チップに加工しボイラーの燃料として燃やされています。国内のボイラーで使われているチップ材のうち国産材のシェアーは 0.1%しかありません。ほとんど輸入のチップが使われています。行き場のない伐採木を燃やし、「木材」として有効利用されていない、というのが実態です。資源としてもっと良い活用法があるはずです。

884tには小枝も含まれているので全部をそのまま使えませんが、例えばこれを全部有効利用すると仮定して試算すると、薪ストーブなら 300 軒ほどが 1 年間通して使えます。床面積 150 ㎡の木造住宅なら 30 棟近く建ちます。884 トンという伐採木の量のイメージが何となく

分かっていただけるかと思います。ですから、「もったいないじゃないか。これは地域の財産だよ、緑の資源だよ。」と私はずっと言い続けています。

残念なことに専門家であるはずの造園家は、生きている樹は一生懸命育てますが、立派に大きく育った樹が切られてもほとんどの人が無関心です。国も含め造園業界の人たちは無関心です。生きている樹は公園緑地課が所管ですが、切られるとゴミ対策課に所管が変わる、という行政の構造も環境への哲学が欠けています。

「ライフサイクルアセスメント」という言葉がありますが、これは建物を建てる時、建物を使用する期間、そして建物の用途が終わり廃棄される時に環境への負荷を如何に軽減するかということが法律で求められています。ですが、「緑のライフサイクルアセスメント」については議論があまりありません。剪定枝を使った堆肥作りは昔から行われていますが、需要は期待できず閉塞的な状況です。苗を植えて育て、切った時にそれをどう活用していくかという「緑のライフサイクルアセスメント」への意識がもっと高まって欲しいと思っています。

一方、農業においては「都市農業」が注目されています。都市農業という言葉もごく一般的になってきました。それなら林業においても

「都市林業」というのがあって良いじゃないかと。私の造語ではありませんが、最近ドイツなどで使われ始めています。私の思い描く「都市林業」とは何かと言うと、自分たちの住むまちで育った樹木が伐採木として出たときは、その材を活用して炭や木工品、家具建材、あるいは子どもたちの環境教育、緑育に有効的に活用するということです。都市の中でこのような緑の活用への意識がもっと出てきて欲しいと思います。それを実現させるはじめの一歩として、“まちに製材所を作る”ということを実現させたいと考えています。まだチャレンジを始めたばかりで模索中ですが、造園家としての私のライフワークの最終目標かなと思っています。

なぜ「製材所」なのかというと、伐採木は製材することで用材としての利用価値が高くなります。建物や木工など幅広く用途が広がります。いま伐採木の多くは丸太のまま置かれているので用途が限られてしまいます。公園に製材所があるのが理想ですが、公園でなくてもまちに伐採木の製材所があれば良いと思っています。そして、その用材をどのように使っていくのかという出口も大事です。これまでに、地元の若い建築家やプロダクトデザイナーの人たちとも意見交換しましたが、色んなアイデアがあり手応えを感じています。

まちの伐採木を暮らしに活かしていくって、楽しくありませんか。皆さんが取り組もうとされている竹の活用も同じだと思います。

## 8）“樹が喜ぶ”私の取り組み
## 【その１．まちの樹活用チャレンジショップ】

それでは、私はいま何をやっているのかというと、5 年ほど前に事務所を商店街の一角に移し、オフィスに工房とショップを設けた店舗を開店しました。半分が工房で残り半分をオフィスとショップでシェアーしている感じです。“まちの樹活用チャレンジショップ”をキャッチフレーズに、“樹が喜ぶことをやる”というのがショップのコンセプトです。工房の名前も“樹が喜ぶ”ということで「工房kiki（樹喜）」としました。

ショップでは、地域の伐採木を使った食器などの「木工品」と「たまニュー炭」を使った「炭火焙煎珈琲豆」を製造販売しています。私が取り組んでいる地域の公園や雑木林の伐採木の活用を、社会経済の仕組みに落とし込んでいくチャレンジです。スモールビジネスでも、社会に見せていくことで、“樹が喜ぶ”ことへの理解と意識の変化に繋げていくことが出来ればと願っています。

木工品は、一般的には 2～3 年寝かせた乾燥材を使うのですが、私の場合は「生木木工」と言って生木を加工します。グリーンウッドワークとも呼ばれています。乾燥するプロセスで木が歪んできたり、樹皮や節など木の特徴をデザインに取り込んだりするので、すべて味のある一品ものです。雑木は薪と炭にしか使えないとイメージされが

ちですが、とんでもないですね。立派な食器になります。しかも使っている材は、自分の住んでいる地域の公園や緑地など出所が分かっているので、“ああ、あそこの公園で育った樹ね”という風に親しみを持ってもらえます。店には「あなたの庭の伐採木で木工品を作りませんか」という案内を掲示しています。

炭火焙煎珈琲豆は、公園の伐採木を使った「たまニュー炭」で焙煎した珈琲豆です。「たまニュー炭」の活用方法の一つとして始めました。焙煎する珈琲豆は、フェアトレードとオーガニック、そして品質が良く美味しいスペシャルティ珈琲豆にこだわっています。珈琲豆を炭火で焙煎すると、バーベキューで肉や魚を焼くのと同じように、豆の芯から火が通りふっくらと笑顔の珈琲豆になります。

資料の写真にあるような穴の開いた金属のドラムを使って焙煎しています。電気やガスや温風を使った一般的な焙煎だと温度調整はダイヤル一つで簡単にできますが、炭火はそうはいかないので火力の調整が難しいです。しかし、炭の持っている遠赤外線や近赤外線の効果で、見た目にもふっくら膨らんだ珈琲豆になります。“飲めば違いが分かる！”というのが工房kikiのキャッチフレーズです。実際、そんな感じで常連さんになったお客さんが増えています。嬉しいですね。

資料の「特別な炭焼珈琲」のイラストは、伐採木を活用した「たまニュー炭」で焙煎した珈琲豆のストーリーに共感してくれた岐阜県立森林アカデミーの学生さんが描いてくれたものです。学園祭で工房kikiの炭火焙煎珈琲豆を使ってお店を出した時に製作したポスターです。作者の学生さんから原画を送って頂きました。正しくは「炭焼珈琲」ではなく「炭火焙煎珈琲」なのですが、私の取り組みを良く理解して絵にしてくれました。予期していなかった学生さんからのオファーでしたので嬉しかったですね。学園祭で販売した炭火焙煎珈琲は完売だったようです。

余談になりますが、地元八王子市の奥山にある場所で樹液を採取し、メイプルシロップを作っています。もう 10 年ほどやっています。私が「東京メイプルシロップ」とネーミングしましたが、商標登録はしていません。福井に来る前日に樹液採取の装置を設置してきました。本場カナダでは糖度の高いサトウカエデを使いますが、私は地元のイタヤカエデを使っています。山に自生しているイタヤカエデですが、太い 2 本の樹から昨年は 80ℓほど採取しました。この樹液をガスコンロで煮詰めてメイプルシロップを作るんですが、製品となるのは樹液の 1/50 の量しかありません。鍋の底にちょっと残るぐらいです。糖度は本場物にはかないませんが、味は立派なメイプルシロップです。東京の森のめぐみです。

## 【その２．みどりの記憶を繋ぐプロジェクト】

樹が喜ぶ取り組みとして「みどりの記憶」をテーマに取り組んでいます。

「みどりの記憶」というのは、例えば、子どもの頃に写真に写っていた樹を 2～30 年経って見に行くと大きく成長しているのに驚きます。

普段は気がつきませんが、時間の経過の中で人も樹も成長しています。例えば、毎日通る道筋にある桜がある日突然切られてしまうと「あぁ、あそこにあった桜の木。いつも花が咲くのを楽しみにしていたのに残念。」というようなことがありますよね。私がこだわっている「みどりの記憶」とは、そういう日常の風景と人との関わりで、時間をかけ培われてきた記憶です。人の成長に伴走してきた身近な自然であり、ふるさとの心を滋養するエッセンスです。だから、このみどりの記憶を繋いでいくことは、人間が元気に暮らしていく為に大事なんです。樹が切られたら若木を植えるということではなく、切られた樹が培ってきた記憶を次に繋いでいくことが大切なんです。

仕事で住宅の庭を造ることがあります。世代交代で庭を改築する時に、できるだけ既存の樹を残すようにしますがどうしても切らなくてはいけない場合があります。お爺ちゃんが植えた庭の桜を切ってしまったけど、その樹で家族が食事をする食器ができたら素晴らしいと思いませんか。お爺ちゃんの植えた“桜の木の記憶”が“木の食器”として生まれ変われば、みどりの記憶は形を変えて家族に繋がっていきます。

3 年前に地元多摩市で「みどりの記憶を繋ぐプロジェクト」が始まり

ました。資料の図は、市のホームページに掲載されているものですが、私が企画提案し実現させた現在進行中のプロジェクトです。これは何かというと、多摩中央公園の中に新しく中央図書館が作られることになり、40 年以上育ってきた大きな樹々が伐採されてしまう。それでは、その樹の記憶を繋いでいこうと企画したものです。伐採された木を製材し、図書館の中の子ども用の読書机と椅子を作ります。その他にも、木工のワークショップや炭やきなど色々なイベントをしながら、この伐採木の記憶を繋いでいこうというプロジェクトです。

資料の右にある新聞の切り抜きは、『緑の記憶　未来につなげる』と朝日新聞に掲載された「市民起工式（伐採起工式）」の記事です。多摩市では初めて市民が中心になって公共工事の起工式を行いました。普通であれば建設工事が始まる際に工事現場の周りに囲いが設置され、知らない間に重機が入り立木がバンバンと切られてしまいます。公園の緑として長年市民に親しまれてきた樹々ですから、伐採するなら「市民起工式」として市民が樹を切るところから始めようと企画しました。これは市長をはじめ市の関係者にも好評でした。ちょっとしたアイデアですが、こういう人と緑との繋がり方も大事だと考えています。

中央図書館に設置された、伐採木で作られた読書机と椅子

## ９）ちょっと光り始めた「たまニュー炭」

ここで「たまニュー炭」がちょっと光り始めた自慢話をさせて下さい。こういう活動を長年していると色んな方々が注目して下さり、様々なアクションがあります。

一つは、いま炭やき活動に使っている一本杉公園の炭焼き窯が「多摩市の宝物」に選ばれたことです。多摩市の複合文化施設「パル

テノン多摩」が主催した企画展示「多摩市の宝物」に選ばれました。結構大きい展示スペースを割いていただき、私のビデオメッセージも展示されました。我々の炭やき活動が資料館のような場所で展示されたのは初めてです。25 年余続けてきた一本杉炭やき倶楽部の炭やき活動が“地域の宝物”として評価してもらえたのはとても光栄なことですし、元気をもらいました。

そして、今年の1月に「たまニュー炭」が地域の特産品に選ばれました。パルテノン多摩が、地域の空中写真を撮るためクラウドファンディングを実施し、目標金額以上の大成功を収めました。そのクラウドファンディングの返礼品として多摩市の特産品が選ばれるのですが、「たまニュー炭」と工房kikiの「炭火焙煎珈琲豆」がその返礼品に選ばれました。「特産品」というのは市が正式に認定しているわけではなく、これって「特産品」だよねって私が言っています。

「たまニュー炭」で焙煎している「炭火焙煎珈琲豆」ですが、企業の環境CSRと連携した販売も行っています。私のチャレンジに共感して頂いたT社は、国産の伐採木を活用し家具などを製作する大きなインテリア製作会社です。その会社で飲まれている社員と来客用の珈琲に、工房kikiの珈琲豆を選んで頂きました。毎月 5 kgの炭火焙

煎珈琲を届けています。T社のホームページには、「我が社の珈琲は公園の伐採木で焙煎しています」「炭を焼き、ふるさとをつくるランドスケープデザイナーが珈琲豆を焙煎しています」と紹介されています。こういう理解ある企業がもっと出てきてくれるとビジネスとしても有り難いです。

メディアでの紹介も増えています。NHKの「首都圏ネットワーク」という情報番組で「炭やき活動」と「たまニュー炭」が紹介されました。丸一日取材されて放送は 7 分ぐらいでしたが、「NHKで7分報道してもらえば立派だよ」と言われました。確かに、放送後の反応は良かったですね。このように、まだちょっとだけですけど「たまニュー炭」が光り始めたかなと感じています。

私がなぜこういう活動を続けているのかと言うと、長年、里山活動を行ってきましたが、これを次の時代にどう繋げていくかという課題解決の道筋がまだ見えてこないからです。かつての雑木林が薪炭林として経済的な価値を生む実用林だったように、地域の中で自然と暮らしが上手く循環していく社会の仕組みを模索しています。雑木林はもう薪炭林としては成立しなくなりました。前段でも少し話しましたが、里山を次の時代に繋げていくには、社会に新しい価値や仕組みを構築していく必要があると考えています。ボランティアだけでできることには限界があります。ですから、私の工房で木工品と炭火焙煎珈琲豆を販売していますが、これは緑の循環型経済を社会に落とし込んでいくチャレンジです。スモールビジネスでも、地域の環境経済の小さな歯車にならないかというチャレンジです。こういう課題解決へのチャレンジが、いまの私の活動のコアになっています。

## 4.「越前・竹取物語」への一歩

### 1）まちに手垢をつける

多摩ニュータウンに住み始めた当初から“まちに手垢をつける”と言い続けています。まちを手垢で汚そうという事ではありません。

例えば、自分の住まいの近くの空いた場所に、花があると綺麗だからと花を植えたりする。植えれば、元気に育っているか、水涸れしていないか、と気になります。そうすると花を植えた場所が自分の“身

近な場所”の一つになっていきます。そういう場所がまちの中のあちこちにできれば、住んでいる街に愛着が湧いてくる。要は、自分のまちに何か色々と“自分の手垢”となる行動を重ね、自分史の記憶を積み重ねていくという事です。

多摩ニュータウンは、造成されたまっさらの土地に全国から縁もゆかりもない人たちが集まり住んでいます。行政は「ここを故郷にしよう」と言います。でも、縁もゆかりも無い土地がそう簡単に故郷にはなりません。では、故郷にするにはどうすれば良いのか。やはり、住み手が“ここを故郷にするぞ”、という意識を持って積極的に行動していかなければ我がまちは故郷にならない、と考えています。その行動が“まちに手垢を付ける”ということです。私は今でも実践しています。

ですから、皆さんがこれから地域の中で活動する際に、自分が手をかけたところには思いや記憶が残ります。そういう積み重ねが、地域の地元愛、故郷というものに繋がります。愛着のあるまちであれば、住み心地の良いまちにしたいという活動意欲も湧いてくると思います。

## 2）竹の活用のはじめの一歩

竹の活用に関するアイデアを少しお話させて頂きます。

今は環境の時代と言われてSDGsなど社会の意識は少し高くなっていますが、それを行動に移す人はまだまだ少ないです。今日の講演会に集まっている我々はマイノリティだと理解した方が良いと思います。では、皆さんが取り組んでいる「竹林」や「里山」という“門前”に、少しでも多くの人たちに来てもらうにはどうしたら良いのか。“門前”まで来てくれれば、我々が手を差し伸べれば中に入ってもらえるわけです。“門前”に来てもらう方法はいろいろありますが、行事はその一つです。皆さんも工夫されて楽しい行事をされていると思いますが、参考までにいくつか楽しい行事を紹介します。

例えば「炭やき」ですが、短時間で炭を焼くには「簡易製炭法」という方法があります。本窯ですと一週間かかりますが、この方法だと火入れから炭出しまで一泊二日でできます。ドラム缶を使った「ドラム缶窯」なら校庭の砂場を使ってできます。地面を少し掘る「伏せ焼き」なら、ブロックとトタンなどがあれば簡単にできます。最近使われ始めた「無煙炭化器」という大きなフライパンのような容器で作る方法もあります。これは数時間でできますが、できた炭は燃料用ではなく土壌改良材として使われます。竹を大量に短時間で処理する場合には便利です。炭やきの煙の問題をクリアーできれば、意外と簡単にできる行

事です。「木こり体験」をセットにすると楽しさが倍増します。

「竹紙づくり」というのもあります。これは、詳細はネットで検索していただければ出てきますが、ちょっと手間と時間がかかります。でも竹から紙ができるプロセスを自分の手で行えるので、大人でも楽しめる行事です。竹が紙に変わるというのはワクワクします。

その他、「タケノコ掘り」「バームクーヘンづくり」「竹筒炊き込みご飯」など、食べることに関する行事は人気ですね。私の場合には、「タケノコ掘り」では掘ってきたタケノコを焚き火にそのまま放り込むというワイルドな焼き方をしています。見た目以上に美味しいので大好評です。「バームクーヘンづくり」は、竹を芯にして作ります。時間が少しかかるので、参加者が交代しながら作業を行い完成させる楽しみがあります。「竹筒炊き込みご飯」は、白米だけでなく五目ご飯、鶏飯などバリエーションを増やすと楽しいです。竹筒を割ってご飯を取り出すパフォーマンスも大事です。やり方を工夫すると行事が盛り上がります。こういう活動を積み重ねながら竹林整備の“門前”に多くの人を集め、仲間を増やしていくことが活動を継続していく力になります。

## 3）里山活動を支援してくれる制度

里山活動を行っていくには、会費だけでは十分な資金にならない

場合があります。その場合には、活動を支援してくれる助成金などの制度を活用する方法があります。既に、民間の助成金を活用されている団体もいらっしゃると思います。先ほど「ふくい市民活動基金助成事業」については触れましたので、ここでは里山活動の支援につながる可能性を持った公的な制度について紹介します。

【森林環境贈与税】

ご存じの方もいるかもしれませんが、「森林環境譲与税」というのがあります。2024 年度から国税として 1 人年額 1,000 円の「森林環境税」の徴収が始まります。集まった税金を森林環境保全に繋げようということです。これは国から県や市など自治体に「森林環境譲与税」として交付されるお金です。しかも、交付された後、どういう目的に使うかを考えることができる使い勝手の良いお金です。交付は既に数年前から始まっているので調べたところ、福井県は今年度は約 3,000 万円ほど交付されています。どのような使われ方をしているのかは分かりませんが、役所に聞けば分かると思います。

私の地元の多摩市には森はありませんが、昨年は数百万円の「森林環境譲与税」が交付されています。先ほど紹介した「みどりの記憶をつなぐプロジェクト」も「森林環境譲与税」を使っています。必ずしも

森林に直接関わらない取り組みにも使えるお金のようです。

このような使い勝手の良い「森林環境贈与税」が来年度から本格的に交付が始まります。皆さんが竹林整備に関する色々な事業など検討され、地元の行政に「森林環境譲与税」を使った取り組みを企画提案すれば実現できる可能性があります。

【東京グリーンシップ・アクション】

東京都にはNPOなどの里山活動団体と、自然環境保全などの社会貢献活動に参加したい企業をマッチングする「東京グリーンシップ・アクション」という制度があります。東京都は公園緑地以外に山や丘陵地などに50の保全地域を持っています。その内のいくつかの地域で里山の自然環境維持活動を行っている環境NPOがあります。それらの各NPOが、下草刈りや間伐などの自然環境保全活動に関連した有償の体験プログラムを作り、東京都がその体験プログラムに参加したい企業をマッチングするという制度です。10 年以上前から続いている制度です。現在登録している企業は約 30 社もあります。しかも、富士ゼロックス、丸紅、大成建設など大手の企業が多いです。

例えば、「〇〇里山公園、〇月〇日、そのプログラム参加します」と申し込むと、有償プログラムの対価がNPOに支払われます。プログラムによって対価は異なりますが数十万円オーダーです。このお金がNPOの活動資金になります。滋賀県でも似たような取り組みが行われています。最近は企業の自然環境保全への意識が高くなってきているので、この手法は福井県でも使えるのではないかと思います。是非検討してみては如何でしょうか。

## 4）『越前竹林公園』の妄想（提案）

せっかく福井まで来たので、最後に『越前竹林公園』という“私の妄想”をお話しします。

手入れされた竹林って美しくって心地良い空間ですよね。京都の嵯峨野の竹林だけじゃなく、ご近所でも手入れされた竹林って本当に美しい。福井県にも美しい竹林があると思いますが、県内の「残したい里山リスト 30」をチェックしましたが「竹林」と名の付く場所は一つも見つからなかったですね。ならば、1 つぐらい竹林の名の付く公園

があっても良いのではないかと思った次第です。

進士先生が所長をされている「里山里海湖研究所」の基本理念を見ましたが素晴らしいですね。「生物多様性」「生活多様性」「経済多様性」「景観多様性」の 4 つの多様性を育み、地域を元気にする。この理念をベースに美しい竹林公園ができたら素晴らしいです。

そこに行けば、みんなが竹林問題への“門前”に立てる学習・学び・体験ができたり。或いは、地元の竹を使った「竹工芸」や「竹アート」の情報発信、さらには地元の企業と連携して新しい竹の活用などの研究開発をするとか。観光も大事ですね。福井県には有名な観光地が沢山ありますが、その中に「越前竹林公園」が加わったら良いなぁと。そんな妄想を思い描いています。全国には「竹林公園」と名の付く施設はいくつかありますが、竹林も展示施設も充実しているのは「京都市洛西竹林公園」くらいですね。施設も充実した美しい「竹林公園」は全国にまだ少ないです。

最初に「かぐや姫」の話をしましたけれども、「かぐや姫」が月に帰りたくないと思うような美しい竹林公園。「かぐや姫」が、“福井には美しい竹林があるからもうしばらくここに居ようかしら”って、「竹取物語」の

ストーリーを変えてしまうような魅力的な「竹林公園」が良いですね。

4 つの多様性を育む、私の妄想『越前竹林公園』が誕生すれば、福井県から新しい“竹の文化”が生まれるかも知れません。

ご清聴ありがとうございました。

祐乗坊さんの活動状況は下記ホームページをご覧ください。

●一本杉炭やき倶楽部のホームページ

●工房 kiki（炭火焙煎珈琲豆）のホームページ

●（有）ゆう環境デザイン計画のホームページ